

令和 4 年 6 月 17 日

報道機関 各位

第29回「人文知」コレギウム 「東アジアの言語を探究する」

■ 概要

富山大学人文学部は、学部教員による研究会「人文知」コレギウムを定期的を開催しております。富山県の「人文知」の拠点として、人文研究のさらなる高みを目指して、様々な分野の教員が集い、相互に研究交流を図ります（※「コレギウム」は「仲間たちの集い」という意味）。

来る令和4年6月29日（水）に開催予定の第29回では「東アジアの言語を探究する」をテーマに研究発表を行います。（詳細は、別添チラシをご参照ください）

■ 日時・場所 他

富山大学人文学部棟3階第6講義室（対面にて開催）

（定員110名 ※事前登録が必要です）

第29回（令和4年6月29日（水）、対面にて開催）

13:30-14:30 上保敏 「朝鮮語の處格と屬格をめぐって」

14:30-15:30 川島拓馬 「文法形式の成立から見る日本語の変化」

一般の方々や学生の聴講も可能です。多くの方々のご参加をお待ちしております。

つきましては、取材・報道方よろしくお取り計らい願います。

【本発表資料のお問い合わせ先】

富山大学人文学部事務系事務部人文学系総務課（人文担当）

TEL. 076-445-6131

ウェブサイト：<https://www.hmt.u-toyama.ac.jp/>

第 29 回「人文知」コレギウム

東アジアの言語を探究する

2022年6月29日（水）13:30～15:30

上保敏（朝鮮語学・准教授）

朝鮮語の處格と属格を めぐって

13:30～14:30

現代朝鮮語の處格[e]と属格[üi]は、一応、形態が異なるとされるが、属格がしばしば[e]と実現する場合があります、形態上、両者の区別がつかなくなる。もっとも、處格と属格は統語構造上、様相を異にするため、基本的には衝突は起こらず、支障はない(とされる)。ただそうすると、そもそも朝鮮語は、處格と属格の区別がなかった言語なのではないか、という疑問も浮かぶようになる。本発表では、通時的にさかのぼりつつ、このような現象が生じるようになった背景について探っていく。

川島拓馬（日本語学・講師）

文法形式の成立から見る 日本語の変化

14:30～15:30

日本語において文法的関係性を表す形式には様々なものがあるが、こういった形式が用いられるかは時代によって異なる。平安時代には広く使われた「ぬ」「めり」などは姿を消し、一方で「はずだ」「つもりだ」などは比較的最近になって登場した形式である。本発表では、日本語史上で新しく生まれた文法形式を取り上げ、その成立や変遷の過程を考えると同時に、文法形式の成立に見られる類型について検討したい。また、文法形式の移り変わりから見る日本語の歴史、および現代日本語のあり様を捉えるための方策についても考察を試みる。

事前申込お願い致します

下記 URL または QR コードからお申し込みください。

<https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=Pxqw12Ujs0iFczfbm9gJuKfUOTK-JFJEvf-f0mqex9URVZSTEw4MFdLM1AwSU5NWjdTT05XMzA4Si4u>

申込締切後、登録されたメールアドレスに詳細をお送りします。メールアドレスに誤りがあると案内をお送りすることができませんので、ご注意ください。前日までに連絡がない場合は、下記総務課にお問い合わせください。

申込締切: 2022年6月26日(日)

聴講は無料です。学生・一般の方の聴講を歓迎いたします。

